

1 May 2018

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 17



Theodore Watts-Dunton の葬儀を巡って

近畿大学名誉教授 河村 民部

セオドアの死に関しては、Thomas Hake の伝記などで、既に明らかなように、その日時は 1914 年 6 月 6 日の午後 6 時 25 分である。妻のクレアラ(Clara)が述べているように、小説家 Charles Reade の *Hard Cash* (1868)の中で、船長が赤道直下の船上から見る落日の場面の時間である。セオドアは、息を引き取る当日、クレアラにこの小説『現ナマ』の丁度この日没の場面を読んでもらうつもりで、そこに印をしておいたのであったが、そこはクレアラが用事で帰ってから読むと言っておいた箇所であった。クレアラはこの偶然の一致のことを彼女の夫に関する回想記で触れているが、奇しき因縁である。6日は土曜日に当たることも調べた。

だが、これまで秘書のヘイクも妻のクレアラもセオドアの葬儀に関しては、一言も言及していないので、不明であった。それが判明したのである。それは筆者が2、3年前からコンタクトを取っているアメリカのオースティンにある The University of Texas の図書館に、セオドアの友人で出版社の社主であったジョン・レーン(John Lane)のコレクションがアーカイヴにあり、そのこの図書館員の Reid Echols (Reference Services Intern, Harry Ransom Center) が親切にも筆者の要請に応じて、そのコレクションに眠っているクレアラからジョン・レーンに宛てた手紙の1通をコピーして送付してくれた。その手紙の日付は 1914 年 6 月 30 日であり、珍しくクレアラがタイピングしたその手紙には、彼女がジョンに、「あの金曜日にノーウッドでお見掛けしましたが、遠路ありがとうございます」(I saw you at Norwood on that day, it was good of you to come such a long way.)と述べている箇所がある。手紙全体の内容は、どうやら夫の葬儀のことで、クレアラがジョンの妻に逢って、親切に慰めてもらったことへの礼である。

そこで筆者は既にセオドアがノーウッドの墓地に眠っていることを、ヘイクの伝記から知っていたので、クレアラの「ノーウッドでお逢いして」という表現からこれは夫の葬儀の時だと分かった。だが問題は「あの金曜日」である。セオドアの死は 6 月 6 日の夕方であることは上述した。その日は土曜日であった。では「あの金曜日」とは何時の事なのか。このクレアラの言及が正しいとするならば、「あの金曜日」というのは 6 月 12 日ということになる。亡くなってから 6 日も経っている。そこで筆者は 6 月 12 日が、果たして、セオドアの葬儀の日であったのかどうかを調べる必要に迫られたというわけである。死から 6 日のちというのは少し遅すぎるのではないかと思ったからである。

そこで筆者はインターネットを駆使して、昼夜を分かたず、手術後の眼を厭わず、検索を始めた。それで BNA (British Newspaper Archives Co. UK) に登録して、分かったことは、*The Birmingham Daily Mail*

(Monday, June 8, 1914)に、“Poet, Novelist and Critic. Sudden Death of Mr. Theodore Watts-Dunton. Great Friend of Swinburne.”という見出しで、セオドアが June 6, 1914 の夕方に、突然亡くなったこと、そして埋葬 (inter)は、“it will take place at Norwood Cemetery on Friday at 2:30 o'clock.”と報じられた事実である。クレアラがジョン・レーンに宛てた手紙にも、金曜日に Norwood で見かけた旨言及し、礼を述べているので、葬儀は死後 6 日のち、つまり、12 日 (金) であったことがこれで判明したわけだ。

だが、筆者はそれでもなお、死亡から 6 日ものちの葬儀にはまだこだわりを捨てきれない。それで、いつものように Findmypast や GRO (General Register Office, UK) への問い合わせを繰り返していたが、葬儀の詳細には至らなかった。次に、埋葬場所が判明しているからには、そこに直接問い合わせるのが良いと考えて、ノーウッド墓地のオフィス—ロンドンの南東の Lambeth 地区にある—to メールで問い合わせた。だが、相手のサーバーからは“spam” (迷惑メール) として何度送っても拒絶され続けた。それでも懲りずに、別のアドレスを見つけて、やっと事情を説明して、葬儀の記録のコピーを入手したい旨を伝えた。ウェブ上のノーウッド墓地の説明では、直接記録を閲覧に墓地の事務所に来られない場合には、一人当たりの検索料として、£7.50 必要だといっているので、返事が来たら、登録して、支払うつもりでいた。

間もなくランベスの事務所の David Walden 氏から返事が来て、確かに Walter Theodore Watts-Dunton は 1914 年 6 月 12 日にノーウッドの家族墓地 (family grave) 11576 Sq 97 に「埋葬されている(buried)」が、彼の埋葬を指示した人物などに関する記録がほとんどなくて、詳細は分からないと言う。これで妻クレアラがジョン・レーンに言った「あの金曜日」、そしてバーミンガム・デイリー・メールの死亡記事にいう「金曜日に埋葬予定」というのが、6 月 12 日であることが明らかとなった。その時には、妻のクレアラは言うに及ばず、少なくとも秘書のトマス・ヘイク及び多くの友人の内、ジョン・レーンは参列していたことが分かる。

だがジョン・レーンの葬儀参列が、後にセオドアの未刊小説 *Carniola* の出版を、予定していた Messrs. Harper and Brothers ではなくて、ジョン・レーンが引き受ける契機になったかどうかは、分からない。ニュージーランドの新聞 *Auckland Star* は、1917 年の秋に *Carniola* が今印刷中であり、この秋にジョン・レーンから出版されるという予告記事を書いていた (6 Oct. 1917) のだが、どうしたわけか、これは実現の運びには到らないで、*Carniola* はどこに消えたか、幻の小説となっているのである。

さらにウォールデン氏の言うセオドアのノーウッド墓地での「埋葬」(burial) について、再度問い合わせを試みた。それはセオドアの埋葬は、火葬 (cremation) の後の遺骨の埋葬なのか、火葬を伴わない土葬の事なのか、今一つ明らかではなかったからだ。そうするとまたしても返事を呉れて、それは文字通り「土葬」を意味する埋葬であることが判明した。さらに序に、セオドアが死んでから 6 日も経つての葬式はなぜか、特別な理由があるのかどうかを問うてみたところ、「丁寧な葬儀にはそれくらいの日数をかけてするのが当時は普通であった」という返事である。これでセオドアの埋葬に関する謎は全て解けた。

否もう一つある。それはウォールデン氏が、セオドアの墓は「家族墓地」だと述べている点である。それで、筆者は彼の両親である John King Watts (1808–1884) と Susannah Watts (1805–1881) の死について、その場所を調べてみた。父親は死亡場所が、Norwich, Norfolk で、母親は North Walsham, Norfolk とそれぞれ死亡場所が違っている。二人の埋葬は、恐らくノーフォークのどこかで行われたのだろう。

だが、セオドアの墓地は、「家族墓地」と指定されていることからすると、両親がロンドンのノーウッド墓地に埋葬されていないとすれば、セオドアの他の家族が埋葬されている可能性がある。それで改めてそのことを確かめるために、ノーウッド墓地に埋葬されていると思われる家族の名を捜すべく、7,000 人を超す埋葬者の中から、A~Z を全て辿って、アルファベットの W の項まで到達し、そこで Watts に関係する人物を洗ってみた。すると、予期したことはあるが、両親の名前は、この墓地にはない。だが、セオドアの弟 2 人の名前があるではないか。ここに最初に埋葬されたのは、四男の Lorenza Edwin Watts (b.Jan.26, 1846–d.Sep.9, 1868) が最初で、続いたのが次男の Alfred Eugene Watts (Jan.7,1835–d.Jan.1,1879) であることが判明した。そしてこの 2 人の弟に続いたのが、長男の Walter Theodore Watts-Dunton (b.Oct.12, 1832—Jun.6, 1914) であったのだ。これでこのノーウッド墓地が「家族墓地」であるというのに、納得がいく。3 人共その墓石は三角形をした横長の長方形の石で、両斜面に墓碑銘が刻まれているのが写真で分かる。このことから、3 人共に「土葬」(burial)であることが判明。緑の芝生の上に肌色をしたその墓石が 3 つ、仲良く横たえられている。

これでさらに納得がいったのは、セオドアの妻クレアラが亡くなった時、彼女は夫の墓地には埋葬されずに、自分の家族、つまり父と母の眠る Putney Vale Cemetery に、「火葬」(cremated)されて眠ることになったことである。クレアラの父 Gustav Reich (1843–1923) は 80 歳、妻の Jane Avery Reich (1842–1909) は 67 歳で、ロンドン Wandsworth の同じ墓地に埋葬されていたからである。クレアラの火葬に関しては、その詳細を、別の所 (近畿大学文学部論集『文学・芸術・文化』第 2 8 巻第 1 号 2016.9) に記したことがある。セオドアの土葬に関しては、火葬のように、ガスを幾ら使って何分焼却したかとか、その灰をどう処理したかなど、細目の記録がないのは、致し方のな

いことであろう。セオドアが亡くなって6日も経って埋葬したのも、「火葬」ではなくて、この「土葬」と関わりがあるのかもしれない。

このセオドアの埋葬との関わりで、明らかになった事実がある。それはセオドアがパインズ邸にスウィンバーンと暮らすようになった時に、他にもセオドアの姉妹で、Charles Mason という同業のソリシターと結婚し、息子 Bertie と3人で一緒に暮らすようになった女が一体誰なのかが、これまで拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝』においても、また、翻訳『ヴェスプリー・タワーズ』の解説においても、明らかにできなかったことである。セオドアのノーウッド墓地の埋葬を調べて行くうちに、ウェブ上で埋葬者の略歴を、Elisa Rolle という女性が述べている中に、パインズ邸でのセオドアの同居者が Miranda Mason であることが述べられているのを発見した。Miranda のファースト・ネームは、国勢調査によると、Wilhelmina で、セオドアより7つ歳下の2人目の妹である。彼女は1841年、St. Ives 生まれで、1874年に Charles Mason との間に Bertie が生まれている。スウィンバーンが同居して、この Bertie を大層可愛がったことは、ヘイクの伝記に言及されている。このミランダの後にセオドアとパインズ邸に同居するようになるのが、ミランダの2つ歳年の未婚のテレサ (Thereza) であったことも確定した。



女性参政権獲得 100 周年を考えるー パーラメント広場のフォーセット夫人の銅像を巡って

麗澤大学准教授 佐藤 繭香

今から百年前の1918年2月6日、イギリスでは30歳以上の戸主、または戸主の妻である女性たちに選挙権を認める人民代表法が成立した。この間に、イギリスでは2人の女性首相が登場し、2014年にイングランド国教会で女性主教が認められたように、女性が活躍できる領域は目に見えて拡大している。

一方では、世界ではハリウッドの敏腕映画プロデューサーによるセクハラ疑惑に端を発した「#MeToo 運動」や「Time's up」運動が盛り上がり、2018年の英国アカデミー賞 (BAFTA) では、多くの女優たちが黒いドレスを着用し、セクハラ撲滅や賃金におけるジェンダー格差の解消を訴えたことも記憶に新しい。英国では1年に約120万人が被害を受けているという家庭内暴力の問題なども昨今では話題になっている。百年前、女性参政権活動家エメリン・パンクハースト夫人(1858-1928)が、女性参政権は、「貧しい人々の救済、見窄らしい人や無知な人の向上、公正で高潔な理想やスタンダード、そして人類の進歩」へと繋がると述べていたように、多様な女性の諸問題をはじめとして様々な問題を解決するものと考えられたが、未解決の問題は百年後の今もなお残っていると云わざるをえない。

百周年という記念すべき今年、英国では、女性の参政権獲得を記念する様々な行事が企画されている。イギリス政府は、女性参政権百周年助成金計画として150万ポンドを拠出することを決定した。ロンドン博物館での特別展示をはじめとして、4月24日には、ロンドンのパーラメント広場に穏健派の女性参政権組織である女性参政権協会全国同盟 (NUWSS) の指導者、ミリセント・ガレット・フォーセット夫人(1847-1929)【図1】の銅像の除幕式が行われた。パーラメント広場は、文字どおりイギリスの国会議事堂の北西側に位置し、政治的に意



味のある公共空間である。その場には、11の欧米や英連邦の政治家や活動家の銅像が並んでいる。第二次世界大戦を勝利に導いたウィンストン・チャーチル (1874-1965)、その他には奴隷制を廃止したアメリカのリンカン大統領(1809-1865)、アパルトヘイトを廃絶した南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領 (1918-2013)など、国家または人類の自由・平等、民主主義や人権を守

【図1】ハイド・パークで演説するフォーセット夫人、1913年 (7JCC/O/01/177, LSE collection)

り、輝かしい偉業を成した男性たちの銅像だ。フォーセット夫人の銅像は、そこに加わる初めての女性となる²。この広場にフォーセット夫人の銅像が加わることは、様々な意味を持つ。まず、初めて女性とその偉大な人物たちと肩を並べたことは、フェミニズム運動の一つの成果と言えるだろう。そして、女性参政権獲得の運動が、現在のイギリスを形成する歴史の不可欠な一部であったことが公に認められ、人権や男女の平等を守る為の運動は間違っていないことを確認することにもなる。

ところが、フォーセット夫人の銅像建立に両手を挙げて賛成しないフェミニストたちも実は存在する。エメリン・パンクハースト夫人

【図2】やその長女クリスタベル・パンクハースト(1880-1958)の伝記を執筆した歴史家J. パーヴィスは、フォーセット夫人の銅像の建立に批判的だ。彼女は、『ガーディアン』に寄稿した記事の中で、「パーラメント広場にサフラジェットの銅像が見たかった我々は失望した」とまで記している³。

では、なぜフォーセット夫人ではダメなのか。フォーセット夫人は、戦闘的な活動を繰り広げた「サフラジェット」ではなく、穏健派の「サフラジスト」だからである。20世紀初めにイギリスで盛り上がった女性参政権運動

では、窓ガラスの破壊、投石、監獄でのハンガーストライキなどの活動方法で名を馳せたエメリン・パンクハースト夫人率いる戦闘派の女性社会政治同盟(WSPU)と19世紀から続く女性参政権運動の流れを継承し、ロビー活動をした穏健派のNUWSSの二つの組織が知られているが、フォーセット夫人はNUWSSを率いた。フォーセット夫人の銅像の建立は、女優エマ・ワトソンや『ハリー・ポッター』の作家J. K.ローリングからの支持だけでなく、首相テリーザ・メイの支持をも得ている⁴。フォーセット夫人の銅像の建立の支持者たちは、フォーセット夫人が19世紀後半に女性参政権運動が始まり、1928年の女性の普通選挙権の実現まで全ての場面に立ち会った存在であるからと理由を述べている⁵。しかしながら、パーヴィスは、「あの敬意を表される場所[パーラメント広場]に女性がいることは素晴らしいことであるが、フォーセットは、女性参政権運動の多様性を示す存在ではない」と記し、女性参政権運動の歴史から、急進的であったパンクハースト夫人を消し去る行為であると危惧を抱く⁶。

20世紀の偉大な歴史家E. ホブズボウムは、公共空間へのモニュメント設置の「教育的価値」について言及しているが⁷、パンクハースト夫人の銅像ではなく、フォーセット夫人の銅像を設置することは、その戦闘的な活動方法において批判を浴びがちなWSPUではなく、女性参政権運動史において、フォーセット夫人が率いた穏健派のリベラルな活動の方が女性参政権獲得に大きな役割を果たした「正統」な組織であったと後世に伝えることになるだろう。現代においては、フォーセット夫人よりもパンクハースト夫人の名が圧倒的に知られているが、パーヴィスが危惧するように、今後百年を考えると、運動を一般大衆までに広めたパンクハースト夫人らの功績は過小化され、彼女らの活動方法に批判的な意見がより高まるかもしれない。特に、世界的にテロの脅威が叫ばれる中、WSPUの活動方法はテロと同一視される可能性があるからだ。テリーザ・メイ率いる保守党政権にとっても、ロビー活動を中心として活動を繰り広げたフォーセット夫人の銅像を設置の方が収まりが良く、女性の権利やジェンダー平等を意識した政権であることを静かに訴えることができる。芸術は、「政治支配者や国家の権力を強化するために使われてきた」というホブズボウムの言葉を思い出さざるを得ない⁸。

では、エメリン・パンクハースト夫人を公共の記憶の中に留めておこうとする試みはないのだろうか⁹。実は、今年の12月14日、WSPU発祥の土地であるマンチェスターの中心に位置するセント・ピーターズ広場に、パンクハースト夫人の銅像が建てられる予定であり、この銅像の建立費用が政府から拠出されることが決まった¹⁰。しかし、ロンドンのパーラメント広場に建立されることとは違い、そのもたらす「教育的意味」もまたフォーセット夫人の銅像とは異なる。セント・ピーターズ広場は、1819年に8月6日に選挙法改正を求めて集会を開いていた議会改革を求める群衆に騎兵隊が突撃し死傷者を出したピータールーの大虐殺と呼ばれる歴史的な事件が起きた場であり、政府に弾圧されながらも女性の参政権を求めるために戦ったパンクハースト夫人の銅像の建立は、広場のこうした歴史とも重なり、19世紀より急進派の人々が集ってきた産業都市マンチェスターの歴史を表象する。パンクハースト夫人は、銅像によって正式にマンチェスターの歴史的な記憶の中に加わることになる。また、レスターでは、今年の2月、労働者階級出身のサフラジェットのリス・ホーキンス(1863-1946)の銅像が街の中心にある広場に建立され、その除幕式が行われた。実は、このマンチェスターとレスターは、労働党の地盤が強い地域である。労働党党首ジェレミー・コービンが、女性参政権獲得100周年を記念する映像メッセージにおいて、女性参政権は、「政府によって与えられたものではなく」、「サフラジェットたちと他の多くの人々によって勝ち取られたものである」と述べているが¹¹、政府と敵対した「サフラジェット」は労働党にとっては、共感しやすい表象なのかもしれない¹²。一方で、政権を持つ保守党にとっては、扱いにくい。



【図2】エメリン・パンクハースト夫人
(TWL.2002.118. LSE collection)

また、現在、労働組合会議とロンドン市自治体が協力し、パンクハースト夫人の次女シルヴィア・パンクハースト(1882-1960)の銅像をロンドンの北クラーケンウェル・グリーンに建立しようと試みている。シルヴィアは、WSPUのメンバーではあったが、労働者階級女性のための運動を志すなど、運動の方向性の違いから、母と姉によってWSPUを放逐された。第一次世界大戦が勃発すると、戦争協力をいち早く表明し運動を停止させた母や姉と異なり、平和主義を貫いた「社会主義フェミニスト」である。前述したパーヴィスは、シルヴィアが1931年に執筆したクリスタベルへの「偏見」が含まれた *The Suffragette Movement* がその後の参政権運動史の叙述に影響を与え¹³、パンクハースト夫人や姉クリスタベルに批判的な女性参政権運動の歴史が叙述されてきたと説明している¹⁴。このシルヴィアの功績を母や姉よりも評価する歴史家も多いが¹⁵、クラーケンウェルに彼女の銅像を建立するという事は、労働者階級の伝統が強く残る場所に建立されることということであり、労働者に寄り添って政府と闘ってきたシルヴィアの表象は、左派にとっては格好の政治的なツールとなり得る。

今年、企画されている女性参政権獲得にまつわる記念行事は、ただ単に女性参政権成立を祝い、記念するものではない。銅像の建立で言えば、女性参政権活動家の銅像は、現代における政党、政治家、そしてフェミニストたちの主義主張を代弁する表象となっている。女性参政権獲得から百年を経た後も、彼女たちは、政治的な運動の中に巻き込まれ続けている。

注

¹ Emmeline Pankhurst, "A Message from the W.S.P.U.", Leaflet, c.1911-1912 in Jane Marcus, *Suffrage and the Pankhursts*, Vol 8, Routledge, 1987, pp.181-182.

² フォーセット夫人の銅像は、ターナー賞を受賞したこともある女性彫刻家ジリアン・ウェアリングが手がけた。"Millicent Fawcett statue gets Parliament Square go ahead", *BBC news*, 20 Sept 2017. <http://www.bbc.com/news/k-england-london-41330508> (2018年3月1日閲覧)

³ June Purvis, "A suffragist statue in Parliament Square would write Emmeline Pankhurst out of history," *The Guardian*, 27 Sept 2017. <https://www.theguardian.com/commentisfree/2017/sep/27/suffragist-statue-parliament-square-emmeline-pankhurst-millicent-fawcett> (2018年3月1日閲覧); Rachel Holmes, "A new feminist statue is a great idea. But they picked the wrong feminist," *The Guardian*, 14 Apr 2017. <https://www.theguardian.com/commentisfree/2017/apr/14/new-feminist-statue-women-suffrage-millicent-fawcett> (2018年3月1日閲覧).

⁴ Annunciata Elwes, "Emmeline Pankhurst or Millicent Fawcett? Battle over Westminster Suffragette statue", *Country Life*, 14 Sept 2017. <http://www.countrylife.co.uk/news/women-on-the-plinth-campaigns-for-suffragette-statues-gather-momentum-165536> (2018年3月1日閲覧).

⁵ "Caroline Criado Perez on fighting for a female statue in Parliament Square", *Financial Times*, 7 Dec 2017. <https://www.ft.com/content/68990e0c-da1b-11e7-a039-c64b1c09b482> (2018年3月1日閲覧). Purvis, *Ibid*.

⁶ June Purvis, *Ibid*. パーヴィスは、フォーセット夫人とパンクハースト夫人の二人の銅像を建立するという案が実現されなかったことが残念であると述べている。フォーセット夫人の銅像の台座部分には、女性参政権獲得に貢献した59名の女性の名前が刻まれることになっており、そこにはもちろんパンクハースト夫人をはじめとしたWSPUのメンバーも含まれるが、銅像として表象されることとは比べ物にもならない。

⁷ エリック・ホブズボーム『破断の時代：20世紀の社会と文化』、木畑洋一・後藤春美・菅靖子・原田真美訳、慶應義塾大学出版会、2015年、320頁。

⁸ ホブズボーム『破断の時代：20世紀の社会と文化』、315頁。

⁹ ロンドンの国会議事堂近く、ヴィクトリア・タワー・ガーデンズには、パンクハースト夫人の銅像が1930年に建立されているが、国会議事堂近くとは言ってもやはりパラメント広場ではない。

¹⁰ "Manchester's Emmeline Pankhurst statue gets government backing", *The Guardian*, 17 Dec 2017.

<https://www.theguardian.com/uk-news/2017/dec/17/manchester-emmeline-pankhurst-statue-government-backing> (2018年3月1日閲覧). この広場にすでに建立されている16の男性の銅像の中に初めて女性が加わることになる。

¹¹ Jeremy Corbyn. Video message. 5 Feb 2018, 23:00 p.m. Tweet.

¹² 1913年に、ダービー競馬にて、国王所有の馬の前で女性参政権獲得を訴えに飛び出し、後に亡くなったサフラジェット、エミリー・ワイルディング・デーヴィソン(1872-1913)の銅像の国会議事堂への建立を、労働党議員エミリー・ソーンベリーは訴えている。"MPs call for statue of Emily Davison in Parliament", *The Guardian*, 4 June 2013.

<https://www.theguardian.com/politics/2013/jun/04/mps-statue-emily-davison-parliament> (2018年3月1日閲覧).

¹³ Sylvia Pankhurst, *The Suffragette Movement: An intimate account of person and ideals*, Longmans, 1931.

¹⁴ June Purvis, *Christabel Pankhurst: A Biography*, Routledge, 2018, pp.3-6.

¹⁵ Martin Pugh, *The Pankhursts*, Penguin Books, 2002. 日本では、中村久司『サフラジェット: 英国女性参政権運動の肖像とシルヴィア・パンクハースト』大月書店、2018年がある。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2017 年度総会

日時： 2017 年 11 月 18 日（土） 午後 5 時 45 分～午後 6 時

場所： 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス G号館 301 室

（司会：佐藤和哉 事務局長）

議題

【報告事項】

1. 2017 年度活動報告（資料 1）
- I. 運営委員会、役員会関係
 - 2017 年 9 月 8 日 第 1 回 運営委員会（関西学院大学）
 - 2017 年 11 月 17 日 理事会（関西学院大学）
 - 2018 年 1 月 第 2 回 運営委員会（日本女子大学）
 - 2017 年 1 月 28 日 第 1 回 編集委員会（日本女子大学）
 - 2017 年 8 月 7～8 日 第 2 回 編集委員会（メール審議）
- II. 学会誌、ニューズレター
 - 2017 年 5 月 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No.16 発行
 - 2017 年 11 月 『ヴィクトリア朝文化研究』（*Studies in Victorian Culture*）第 15 号発行
- III. 全国大会関係
 - 2017 年 11 月 18 日 第 17 回 全国大会開催（関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス）
- IV. その他
 - 2017 年 5 月 第 18 回大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集
 - 会員情報
 - 対象期間：2016 年 4 月 1 日から 2017 年 3 月 31 日まで
 - 新規入会者 14 名 退会者 19 名
 - 2017 年 3 月 31 日現在 会員 322 名（うち学生 22 名）
2. 学会誌について
 - 上記の通り、発行された。
3. その他
 - 特になし

【審議事項】

1. 2016 年度決算
 - 報告の通り、了承された。
2. 2017 年度予算案
 - 報告の通り、了承された。
3. 学生会員の会費について
 - 学生会員の会費を 2,000 円とすることが了承された。
4. 記念企画について
 - 学会 20 周年記念企画として、『ヴィクトリア文化事典』の出版が提案され、了承された。
5. 「大会・企画委員会」の設置について
 - 大会・企画委員会の設置が提案され、了承された。
6. 理事の再任・改選について
 - 報告の通り、了承された。
5. 2018 年度の理事会と大会について
 - 2018 年度は、11 月 17 日（土）に日本女子大学目白キャンパスで開催される予定
6. その他
 - 特になし

第18回大会のお知らせと研究発表の募集

第18回大会は、2018年11月17日（土）に日本女子大学目白キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「移民・異民たちとイングリッシュネス」〈仮題〉で、パネリストは閑田朋子（日本大学）、勝田俊輔（東京大学）、堀 邦維（日本大学）、田中孝信（大阪市立大学）の予定です。

ラウンドテーブルは「女性参政権獲得への希求」〈仮題〉で、提題者は山口みどり（大東文化大学）、佐藤繭香（麗澤大学）、司会は市川千恵子（茨城大学）の予定です。

特別講演は新井潤美氏（上智大学教授）にお願いすることになっています（題目未定）。どうぞ、振るってご参加ください。

研究発表（発表時間30分、質疑応答15分）を希望する会員は、発表要旨（400字）に略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りいただくか、あるいは添付ファイルで学会のメールアドレスまでお送りください。メールの場合、送信後3日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いいたします。

締切は2018年7月5日（木）必着です。

第19回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2019年11月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第19回全国大会（開催場所と日時は今年の8月に決定される予定です）におけるシンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ2時間30分程度（15分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。締切は2018年12月末日必着といたします。シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2019年1月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締切：2018年12月31日（月）必着

2. 申請方法：様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までメールにてご提出ください。下記の「シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書（Excel形式）」を利用いただいても結構です（<http://www.vssj.jp/conferences.html>からダウンロードしてお使いください）。

3. 申請書必要記載事項

① シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル ② 趣旨（400字程度）

③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）

④ プログラム 1) 司会（氏名、所属） 2) 報告者（氏名、所属） 3) 各報告者の題目および報告要旨（200字程度） 4) タイムテーブル（全体で2時間30分程度〈休憩含む〉に収まるように計画してください）

※シンポジウム／ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1 日本女子大学英文学科佐藤和哉研究室

Tel: 03-5981-3560 E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

編集後記

昨年に引き続き、ヴィクトリア朝文化研究のパイオニアと若手によるエッセイ二編を掲載いたしました。ご寄稿くださいました河村民部先生と佐藤繭香先生には心より御礼申し上げます。また、お忙しいなか、会計報告や来年度の大会に関する情報をお寄せいただきました佐藤和哉事務局長にも感謝いたします。

(NL担当 市川 千恵子)

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学英文学科 佐藤和哉研究室
Tel: 03-5981-3560
E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com
発効日：2018年5月1日